

## 宗教国家アメリカの欧州観

波 津 博 明

アメリカとは何か。これは、この国が唯一の超大国となった現在、日本にとっても欧州にとっても、極めて大きな問題である。だが、アメリカを語る場合、その「宗教国家」としての側面は、あまり認識されていない。この認識不足は、一神教とほとんど縁がない日本では特に顕著だが、政教分離が当然とされている西欧に関しても、かなりの程度あてはまると思われる。

アメリカで、「レフト・ビハインド（取り残されて）」と題された連作小説が、あわせて6000万部を超えるベストセラーになっている。これはアメリカの宗教性のある側面を映し出す現象だが、日本では滅多に言及されないテーマなので、この機会にとりあげたい。（ちなみに、イタリアでは2004年、レブブリカ紙〔4月7日〕が、このシリーズに関するフェデリコ・ランピーニ記者の記事を、まるまる1ページを使って掲載している）

「レフト・ビハインド」現象は、政治的にも重要な意味を持つ。それは、この作品が、米政治に大きな影響力をもつ宗教右派の思想の核にある概念を物語にしたものだからである。

宗教右派の存在は今や、ブッシュ政権を支える勢力として広く知られている。しかし、主流メディアは宗教右派を、もっぱら中絶や同性婚に反対し、「道徳的価値」の再興を求める保守的な人々としてのみ描き出す。それだけなら、彼らの主張は、米国人でなくても、共感するかどうかはともかく、理解はできる。しかし宗教右派、とくにキリスト教原理主義者の多くが共有する中核的イデオロギーは、部外者にとってはカルトと区別できないほど奇怪なものである。そして、「レフト・ビハインド」は、ブッシュ政権最大の支持基盤が世界をどう認識しているかを、具体的にわかりやすく示しているのである。

このシリーズは、1995年に第1巻が出て、一昨年完結した全12巻の大長編である。1巻あたりにすると500万部だが、最近のアメリカで最もヒットした小説であることは間違いない。ビデオにもなっており、まさに一つの社会現象だが、ニューヨークタイムズなどの主流メディアは当初数年間、新聞のベストセラーリストのトップを占め続けるこの作品に、言及することさえまれだった。一流紙のジャーナリストにとっては、理解を越えた、あるいは言及さえはばかれるカルト文化だったようである。しかし、大衆に与える影響力は最初から巨大なものがあつた。

まず指摘しなくてはならないのは、この原作者が1979年、アメリカ最初の大衆的宗教右派運動「道徳多数派」（モラル・マジョリティー）を創設した人々の一人で、レーガン支援に全力をあげてきた原理主義の牧師ティム・ラヘイだということである。そのアイデアをもとに作家ジェリー・ジェンキ

ンズが執筆した筋書きは以下の通りである。

近未来のある日、世界中で一部の人間が突如、姿を消す。着衣は残り、体だけが消えるという奇怪な消え方で、消えたのは、聖書の記述を一言一句信じる原理主義者たち。その後、「取り残された」主人公たちを取り巻く世界は大混乱に陥り、悪魔の手先であるルーマニア人の国連事務総長ニコラエ・カルパティアは「軍縮」「多国間主義」「第三世界支援」などリベラルな言葉を語りつつ、世界支配の陰謀を着々と進める。

続く巻では、七年続く戦乱（「大いなる艱難」Tribulation）で数十億人が死に、ついに反キリスト・カルパティアが権力を握る。真のキリスト教徒はゲリラ的な戦いで抵抗を続けるが、ついにキリストが、第一作で姿を消した人々とともに再臨すると、キリスト教徒たちは無敵となり、悪魔の勢力の弾丸も跳ね返すようになる。そして最後に、悪魔の軍勢は打ち倒される。敵の弾丸を体が跳ね返すというのは、19世紀中国の義和団や、現在のウガンダの武装カルト集団「神の抵抗軍」などが信じていることで、キリスト教原理主義の典型的なカルト性を示していて、驚きを禁じ得ない。筋書き自体も、原理主義者でない者にはSFか幻想小説にしか見えない。

しかしこれこそ、原理主義の教義なのである。教義の核心は「世の終わり／終わりの時（エンド・タイムズ）」「最終戦争（ハルマゲドン）」「反キリスト（悪魔の代理）」「キリスト再臨」、そして「携挙（ラブチャー）」などの概念である。

この教義は、19世紀のアイルランド出身の牧師ジョン・ダービーが唱えた「前千年王国説」に基づく。この説は英国では大きな影響を与えなかったが、米国では巨大な流れになる。ダービーは、歴史を救済までの7段階（ディスペンセーション）に区切る独特の「ディスペンセイションナリズム」を提唱した。「ヨハネの黙示録」など聖書の記述をもとに、近く善と悪の最終戦争が起きるが、神の軍勢が勝利、キリストが再臨し、1000年にわたってキリストが、真のキリスト教徒とともに世界を支配して、最後に審判が行われる、という考え方である。

ダービー説の眼目は、真のキリスト教徒は最終戦争の直前、天へ引き上げられる（「ラブチャー（Rapture、携挙）」）。原理主義者のキーワードである）、という点である。新約聖書（テサロニケ人への第一の手紙第4章16-18）には、「突如として滅びが襲う」時、「主ご自身が、ラッパの鳴り響くうちに、天から下ってこられる。我々は（「キリストにあって死んだ人々」とともに）雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、いつも主とともにいるであろう」と記されている。ダービーはこれをもとに、真のキリスト教徒は、人類の大半が死滅する殲滅戦を、キリストの傍らで無事に見守ることになると解釈した。彼ら自身は犠牲にならないだけでなく、戦後地上を支配する権力が与えられる。「真のキリスト教徒」とは、聖霊に導かれて生まれ変わり（ボーンアゲイン）、聖書の記述をすべて真実と信じるキリスト教徒、つまり原理主義者のことである。

これは原理主義者には魅力的な教義であり、彼らの中にはハルマゲドン待望派も少なくない。レー

ガン政権時代も、レーガンが対ソ強硬論に立っていた前半は、キリスト教原理主義者の強い支持を受けたが、ソ連にゴルバチョフが出て、レーガンが軍縮に向かうと、原理主義者は「ハルマゲドンを遅らせる」として、これに反対した。原理主義者のハルマゲドン待望論はそれほど強い。

こうした教義は、日本人やおそらく大半の欧州人には、子どもだましにしか見えないだろうが、アメリカでは、少なくない人々がこれをリアルに感じている。

ニューズウィーク誌の調査では、米国人の17%が「自分の生きている間に世の終わりが来る」と信じている。「世の終わり」は先述の通り、前千年王国説のキーワードの一つである。プリンストン宗教調査研究所によれば、米国人の31%が「聖書の記述は一言一句、神から靈感を得て書かれた真実」と見なしており、この人々のうち、「聖書の予言」に政治的に対応しようとする人々が、原理主義者と呼ばれる。彼らの周囲には、自分はある時、イエスを救い主と感じ、キリスト教徒として目覚めた、と考える「ボーンアゲイン（生まれ変わり）」キリスト教徒が無数に存在する。ボーンアゲイン体験を持つ人々を一般に福音派と呼ぶが、米国人の42%に及ぶ。ブッシュ自身が四十歳でキリストに目覚め、それまでのアルコール依存症を克服したと語る福音派である。

福音派の8割は保守と見られ、彼らは聖書を言葉通りに読む傾向が強いため、原理主義者の巨大なプールとなる。ブッシュ政権の強固な基盤にもなる。ラヘイは「福音派の85%は私と同じ世界観を持つ」という。これは過大な推定と思われるが、「レフト・ビハインド」の大ヒットを見ると、こうした教義を信じるアメリカ人がたいへんな数にのぼることは間違いない。

なお、前千年王国説などの教義はプロテスタントのものだが、これにカトリックや、時にユダヤ教の保守派も加えたのが、一般に「宗教右派」といわれる。

『レフト・ビハインド』で特に注目すべきは、悪魔の手先が国連事務総長となっている点である。コロラド・マウンテン大学教授のエミー・ジョンソン・フリクホルムは著書『ラブチャー文化』で「(米国を神の国と考える) 原理主義者にとって、世界平和、軍縮、条約、他国との協力などは疑わしいものであり、ブッシュの単独主義は原理主義者の不安にびたり答えた」としている。原理主義者にとって他国の協力は、「あった方がいいが、なければ米国は単独で行動する」というものではなく、「本来ない方がいいもの」なのである。かれらにとって、多国間協力の機構である国連は、それ自体が、神の国アメリカの行動の自由を縛る憎むべき存在だ。

ブッシュは、結婚を「男女間のもの」とする憲法修正案を支持し、学校での創造説教育にも好意的で、中絶や胚性幹細胞の研究に反対し続けている。原理主義者は、同性愛は聖書で禁じられており、「神の与えた生命」は受精卵でも守るべきだ、との立場であり、また創世記にあるとおり、宇宙も生物も神が作り出したと信じるため、こうしたブッシュ政権の方針を全面的に支持する。主流メディアが伝えるのはここまでである。実際には、ブッシュ政権の国連軽視や、フランスをはじめとする欧州諸国との対決も、原理主義者は高く評価する。ブッシュ自身、イラク戦争開始を決意していた2003

年の一般教書演説の最後を「歴史の召命は今や、正しき国家に下った。神が我々を導かれんことを」という宗教的なメッセージで締めくくっており、原理主義者はブッシュを彼ら自身の代表と感じたはずである。

ちなみに、米国でもプロテスタントの主流は、宗教を主に内面的な問題にとらえ、聖書の記述は象徴的な表現と見なす自由主義神学だったし、政治にかかわる時は、黒人の公民権闘争など「社会的正義」を求める運動の先頭に立ち、60-70年代のリベラル派優位を支えてきた。しかし、主流（メインライン）教会は年々影響力を失いつつあり、原理主義者の勢いが急速に伸びている。

「道徳多数派」は87年、著名な右派テレビ伝道師が続々性的スキャンダルで失脚する逆風の中、指導者の牧師ジェリー・フォルウェルも政治から離れ、事実上解散した。89年、代わって登場したのが、道徳多数派より原理主義色を薄め、より広く道徳問題や、医療保険反対、減税など経済政策で保守姿勢を前面に出したキリスト教連合（クリスチャン・コアリション）である。彼らは200万人のメンバーをもち、3000万人に影響を与えるといわれる最大の宗教右派組織で、共和党の州組織の多くが今や、彼らに乗とられた状態になっている。

しかし、原理主義色を薄めたのは、浸透のための戦術と見た方がいいかもしれない。創設者のテレビ伝道師パット・ロバートソン（88年には共和党の大統領予備選に出馬して善戦）は82年、「今年の秋までにハルマゲドンが起き、ソ連に最後の審判が下る」と予言している。彼はこのとき、「私はラプチャーされるので心配していない」と付け加え、ラプチャーを信じていることを明言した。ロバートソンはその後、9.11テロで「アメリカ人が墮落したので、神が罰した」と発言したのが問題になり代表を退いたが、こうした筋金入りの原理主義者が創設した組織である点で、彼らも道徳多数派と変わらない。

ロバートソンは著書「新世界秩序」の中で、「カーターやジョージ・ブッシュ（父）は、国連を支持したことで、それと知らずにサタンの手先となった」と批判、リベラル派知識人に対しては「真実の力の支配（キリスト教原理主義者を通じた神の支配）が始まれば、いわゆる知識人たちは自分たちが無用であること、さらに存在するにも値しないことを知るだろう」と、警告している。国連をサタンの手先と見る姿勢は明らかだろう。

また、原理主義の神学理論家グリー・ノースは「政治—神学戦争は、歴史を通じて戦われてきた」のであり「（リベラル派との）戦いにはいかなる休戦も停戦もない」、聖書に基づく神政に異を唱える者は「サタンが支配する社会を認めるもの」だと非難した。別の原理主義神学者レスター・サムローは著書『悪魔信仰と悪魔祓い』の中で、「サタンは地から平和を奪い、暴力を広めるため悪の力を解き放った」として、人々が、「邪悪な霊」のありとあらゆる現れに抵抗するよう呼びかける。原理主義者が考える「悪霊の現れ」には、国内では、中絶の合法化、同性愛者の権利拡大、男女平等の徹底、国際的には、イラクやイランなどの「悪の枢軸」や、パレスチナ急進派などの「反イスラエル勢力」、

フランスやドイツのような欧州の墮落した無神論的諸国の反米姿勢などがあげられる。

さて、その欧州について、原理主義者がどう見ているのかを考えたい。

ラヘイたちは、「レフト・ビハインド」の読者を「レフト・ビハインド・クラブ」という団体に組織して、毎日電子メールでニューズレターを出しているが、この内容がたいへん興味深い。(なお、ラヘイとともに道徳多数派を創設したフォルウェルは、2004年大統領選後、「21世紀の道徳多数派」として、「信仰と価値の連合」なる組織の結成を宣言、ラヘイを議長に指名した)

例えば、パレスチナ自治政府議会選挙でのイスラム急進派ハマスの勝利について、2月1日付けのニューズレター(タイトルは「兆しをいかに読むか」)は、「反キリストが現れるまで、中東に永続的平和はないということが確認された」としたうえ、旧約ダニエル書第9章27は「最後の地上の支配者がイスラエルと協定を結ぶ時に、7年間に及ぶ大なる辛苦(トリビューション)が始まる」と記している、とする(ただし、ダニエル書の解釈は原理主義者独特のもの)。彼らによれば、反キリストは、中東和平を実現することで称賛され、ついには自ら神を名乗るに至る。イラクのフセイン政権の崩壊も、今後バビロンが再興し、そこから反キリストが現れる前兆とされる。なぜなら、ヨハネの黙示録は、時の終わりに「バビロンが邪悪の中心になる」と予言しているから、という。中東和平の立役者ラビン首相の暗殺、和平に乗り出そうとしていたシャロンの急病など、和平に向かう動きがあるたびに指導者が倒れるのは、反キリストの登場までパレスチナは不安定でなければならないからだ、というのである。

さて、では反キリストになるのはだれか。彼らによると、欧州人なのである。その意味で、原理主義者にとってEUの拡大と統合、EU憲法の調印は重大な展開だ。ニューズレターの中で、時事問題を毎回独自に解釈している原理主義者の牧師マーク・ヒチコックは、2004年10月ローマのカンピドリオの丘でEU憲法条約が調印されたことに関して、カンピドリオの丘が「ローマ帝国の異教信仰の中心だった」ことを重視し、EECを設立した57年の最初のローマ条約も、ここカンピドリオで結ばれたことを想起させる。異教のローマ帝国がキリスト教徒を苛酷に弾圧したこと、原理主義者がとくに重視する「黙示録」のヨハネが象徴的に描いた、ドミティアヌス帝時代(1世紀末)のいわば「悪の帝国」がまさにこのローマだったことを、踏まえたものである。そして、「EUの急速な統合の動きが、終わりの時におけるローマ帝国再興に関する聖書の予言の成就であることは、間違いない」とし、57年条約も憲法条約ともにローマで締結されたことは、「偶然にしては出来過ぎている」と、深い意味を唆す。そして今や問題は、EUが今後いつ、「ヨハネの黙示録」が予言する「10人の王」の集団支配体制に移行するか、そしてその10人体制が、最終的にいつ、ただ一人の王に権限を一任するかだけだ、と述べる。「その一人こそが反キリストとなり、新たな形態のローマ帝国を、そして全世界を支配するだろう」。それが、原理主義者の待望するキリスト再臨とハルマゲドンの引き金なのである。

ちなみに、ヒチコックは、アナン国連事務総長が調印式で、憲法を「EUの歴史の大きな里程碑」と称賛したことにも言及する。「悪の帝国」の復興に、もう一つの「サタンの組織」国連が関与したことの彼らにとっての意味は、もはや指摘するまでもないだろう。

ここで、イランに触れておくと、ニューズレターは昨年8月、ブッシュ大統領が2002年の一般教書演説で語った「悪の枢軸」（イラク、イラン、北朝鮮）を取り上げて、特にイランの核開発と欧州連合（EU）の調停工作に読者の注意を喚起した。ヒチコックによれば、イラン（ペルシャ）は、旧約エゼキエル書が「時の終わりに大きな役割を果たすと予言」しており（第38章5節によれば、「ペルシャ、クシュ、プトが（サタンの手先である、マゴグの地のゴグの軍勢と）ともにおり、皆盾をもち、兜をかぶっている」）、これに加えて、EUが主要な交渉相手として登場したことは、ここでも、「時の終わりのローマ帝国再統一」を示すものであり、いよいよ終わりは近い、ということになる。彼らが欧州を、異教時代のローマ帝国と二重映しにして見ている、という点は忘れるべきではない。

最近あまり登場しなくなったが、ブッシュ政権の外交政策に大きな影響を与えたネオコン（新保守派）を想起してみよう。ネオコンの代表的論客ロバート・ケイガンはイラク戦争前、「欧州が国際法を重視するのは弱さの現れ」と言い切り、「米国人と欧州人が同じ価値観を持っているふりはもうやめよう」とさえ語った。リチャード・パール元国防諮問委員会議長に至っては、イラク戦争にシラク大統領が拒否権行使の決意まで示して反対したことで、「フランスはもう同盟国ではなく、抑止対象だ」と言い放ち、フランスを冷戦時代のソ連の位置に置いた。

欧州を「悪の帝国」に見立てる宗教的反欧州意識は、こうした、ネオコンの世俗的反欧州姿勢に対応するもの、といえよう。

もっとも、原理主義者の欧州観は突然出現したものではないし、アメリカの歴史的な欧州観との共通点もある。アメリカ人は伝統的に、「腐敗堕落した旧大陸」に対する、「神に祝福された新大陸」という対比を、当然のように考えてきたからである。

我々はアメリカ精神の源流を主に、ワシントンやジェファソンら比較的世俗的（あくまで「比較的」な「建国の父祖たち Founding Fathers」に求め、メイフラワー号でやってきたピューリタンの「巡礼の父祖たち Pilgrim Fathers」の重要性をあまり意識しない。だが、建国の背景を踏まえなければ、3人に1人が聖書の記述をそのまま信じる、などという事態の背景が理解できない。そして、アメリカ人の「神の国」意識が、ピューリタンに宗教的迫害を加えた「堕落した欧州」との対比で確立したものであることを考えれば、アメリカ独特の宗教性は、政治的にも重大といわざるをえないのである。

## A Religious Nation

— America's View of Europe —

Hiroaki HAZU

What is America? This question has become an urgent issue for both Japan and Europe in the light of America's status as the sole superpower in today's world. What is clear in many forums discussing this issue is the minimal attention given to the religious character of America as a nation. This tendency to ignore the religious dimension of American nationhood is especially true in Japan where monotheism is an alien experience. In Europe, where the separation of the church and state is taken for granted, the same tendency of viewing America in secular terms predominates.

In America, the Left Behind book series, which is an apocalyptic series of novels based on the bible has sold over 60,000,000 copies, an incredible bestseller. The significance of this phenomenon reflecting the religious nature of America is hardly mentioned in Japan. Hence, I am taking this opportunity to discuss this topic hoping to contribute to the understanding of American unilateralism in relation to Europe and to the rest of the world. (It should be noted that in Italy, Federico Rampini wrote an article about this book series, devoting one page in the April 7, 2004 issue of Repubblica Newspaper.)

Politically, the "Left Behind" series carries enormous significance. This series of novels contains the core of the ideas of the politically influential religious right in America.

As is widely known, the religious right is a strong base of support for the Bush Administration. However, the portrayal in the mainstream media of this group centers on their conservative values advocating moral revival in America and opposing same-sex marriage and abortion. Even non-Americans who may or may not agree with them can understand the religious right's standpoint on these domestic issues. Still, people outside of this group can't help but notice the strange nature of this cult-like organization. The core of the beliefs of the religious right and the majority of the fundamentalist Christians is similar to that of a religious cult. Furthermore, the "Left Behind" series of novels spells out concretely in simple terms, to a great number of political supporters of the Bush administration how to deal with the world.

The first of this series came out in 1995 and the 12-book series was completed two years ago. On average each book sold 5,000,000 copies, making it the biggest best-selling novels in America, in recent memory. Videos have been produced about these novels and their popularity has become a social phenomenon in America. But it has been rare for mainstream media like the New York Times to mention the phenomenon although every volume of the series was on the top of its bestseller list continuously for a number of years from the start of its publication. For journalists, this is beyond their understanding and I think, they even hesitate to refer to these books as they seem to emerge from a cult-culture. However, they have had a big impact on the masses from the very start.

The original author of this series is Tim LaHaye. He was one of the founders of the first religious right movement in America called “The Moral Majority” in 1979. Tim LaHaye, a fundamentalist Christian minister gave his full support for Ronald Reagan. Based on the ideas of this movement, Jerry Jenkins penned the main themes of the Left Behind book series which are as follows.

One day, in the near future, one part of humanity will suddenly disappear all over the world. Those who will disappear will vanish in a strange way, only their clothes will remain, their bodies will rapture. This part of humanity will be those true believers who believe in the word for word description of the bible, the fundamentalist Christians.

Later, the “left behind” heroes in the story are trapped in a world that falls into chaos. Meanwhile, the representative of Satan, the United Nations Secretary General Nicolae Carpathia will continue to talk about disarmament, multilateralism and aid for the Third World, even as he advances a conspiracy to lead the world.

In the continuing volumes, billions of people are killed in the seven-year war (Great Tribulation) and the anti-Christ Carpathia seizes power. The true believers continue to wage a guerilla war and will resist the anti-Christ. Finally, those who disappeared in the first volume will appear along with Christ in the Second Coming, the Christians will prevail, the bullets fired at them by evil forces will bounce back and not hit them. In the end, the military force of the devil is defeated. This belief in the bullets bouncing back, not hitting the bodies of the fighters dates back to the Boxers in 19<sup>th</sup> century China and is also shared by an armed cult group in Uganda called “The Resistance Army of God”. The fact that the fundamentalist Christians believe in these stories, which seem like Science Fiction for non-fundamentalists, demonstrates the cult-like nature of their group.

The fundamentalist Christians believe in the ideas which form part of the themes of the “Left Behind” series of novels. The core of these ideas covers specific themes: End of the World/End Times, Armageddon, Anti-Christ, The Second Coming of Christ and Rapture.

These abovementioned themes are based on the theory of premillennialism propagated by John Nelson Darby, a 19<sup>th</sup> century priest from Ireland. In Britain, this theory never gained much popularity, but in America it became quite widespread. Darby advocated that biblical history could be marked in seven stages called dispensation. This way of uniquely marking off biblical history in seven stages is called “Dispensationalism”. His thoughts are based on biblical passages such as the Revelation according to John which prophesizes that soon, the final battle between good and evil will take place, in which God’s army will win, after which, the Second Coming of Christ will happen. Thus, the 1,000 years of Christ-rule begins and the true believers will reign the world with Christ.

The gist of Darby’s theory embodies the idea of the “Rapture” in which the true believers are lifted up to heaven just before the end of the final battle. Rapture is the keyword of fundamentalist Christians. In the New Testament (I Thessalonians 4: 16–18), the following passage is written: “For the Lord Himself will come down from heaven, with a loud command, with the voice of the archangel and with the trumpet call of God, and the dead in Christ will rise first. After that, we which are still alive and are left will be caught up together with them in the clouds to meet the Lord in the air ... And so, we will be with the Lord forever”. Darby interpreted this pas-



sage to mean that those who are faithful to Christ, the true believers will be safe and protected by the side of Christ while the majority of mankind will perish in the battle of annihilation (Armageddon). These true believers in Christ will survive, they will also be given power to rule the land at the end of the battle. These true believers are guided by the Holy Spirit, they are born again, they believe every word written in the bible as truth, in other words, they are the fundamentalist Christians.

For the fundamentalist Christians, Darby's doctrine is appealing and there are many of them who have long been awaiting for Armageddon to come. During the first half of Reagan's presidency, the fundamentalist Christians strongly supported him with the expectation that he was preparing for the Armageddon, but when he agreed with Gorbachev on the issue of arms reduction, they opposed him because they did not want Armageddon to be delayed. They strongly believe in the certainty of Armageddon.

For most Japanese and probably for most Europeans, this doctrine is childish, but in America, many people believe in it.

In a survey conducted by Newsweek, 17% of Americans responded that they believe the end of the world will happen in their lifetime. "End Times" as previously described is one keyword of premillennialism theory. According to the survey by Princeton Research Center for Religious Studies, 31% of Americans believe that every word and verse written in the bible is true and is inspired by the Holy Spirit. Those who believe that biblical prophecies should be applied to politics are called fundamentalist Christians. There are countless "born again" Christians around the fundamentalist Christians. Born again Christians are those who have rediscovered their faith and have started to feel Jesus' existence in their lives (they have been born again). Those who have experienced being "born again" are generally called evangelical Christians. They comprise 42% of Americans. President Bush himself was born again at the age of 40, Jesus opened his eyes and cured him of alcoholism. He talks about this experience as an evangelical Christian.

80% of the evangelical Christians are conservative. Because of their tendency to take every word written in the bible literally, they are the biggest pool of Christian Fundamentalism in the U.S. They support the Bush administration with unbending loyalty. According to LaHaye, 85% of the evangelical Christians hold the same view of the world as himself. This may sound like an exaggeration, but judging from the popularity of the best-selling "Left Behind" book series, it is beyond doubt that the number of Americans who believe in the doctrine espoused by these books has increased.

Premillennialism is basically a doctrine of the Protestants, but conservative Catholics and Jews are generally referred to as the religious right.

It is interesting to point out that the representative of Satan in the "Left Behind" series is the secretary general of the United Nations. Colorado Mountain College Professor Amy Johnson Frykholm wrote a book, "Rapture Culture", in which she views the unilateralism of the Bush Administration as a consistent response to the wishes of the fundamentalist Christians. The fundamentalist Christians think of America as a nation of God and they are suspicious of world peace, disarmament, treaties and cooperation with other countries. "(When President Bush) insists on the need for the United States to stand alone ... and to set its own agenda, he strikes a chord with mil-

lions of dispensationalist believers who fear that joining with other nations sets a path toward the antichrist", she writes.

Bush supports the constitutional amendment making marriage for men and women only, and teaching the theory of creation at schools and continually opposes abortion and stem-cell research. Fundamentalist Christians believe that same sex marriage is prohibited by the bible and that a fertilized egg is given by God and should be protected. They also believe literally in Genesis which describes the universe and living things as the creation of God. Bush administration's policies along these lines are totally supported by the fundamentalist Christians. The mainstream media's coverage of the fundamentalist Christians' influence on national policies is limited to these issues. However, the fundamentalist Christians also applauded the Bush administration's disregard for the United Nations and America's first confrontational relationship with Europe including France. In his 2003 State of the Union Address, having decided to go to war in Iraq, he mentioned at the end of his speech "a divine historic call has come now and has come down to the right country." He said "we are guided by God". This was clearly a religious message and the fundamentalist Christians must have felt Bush was representing them.

In America, it used to be that the main (you can also say traditional) Protestant Churches took the teachings of the bible as symbolic rather than literal and advanced Theology based on freedom of interpretation. In the civil rights movement from the 1960s through the 1970s, the churches supported the blacks in their struggle for civil rights (social justice). The churches were drawn to support the liberal agenda of the government. This was the beginning of the involvement of churches in politics. However, over the years, the influence of the main line (traditional) churches waned, whereas the fundamentalist Christian agenda rapidly spread.

In 1987, there were a string of sex scandals involving well-known right-wing televangelists who lost their prestige. Reverend Jerry Falwell, the leading televangelist decided to stay away from politics and, as a matter of fact, he disbanded the Moral Majority. In 1989, the Christian Coalition came into existence which, compared to the Moral Majority, its Christian fundamentalism is milder. It advocated policies from ethical issues to opposition to health insurance, to economic policies like tax cuts, it took on a conservative posture. It has two million members and, now, they influence 30 million Americans. It is the biggest religious right organization in the U.S. and many state organizations of the Republican party are dominated by the member of this Coalition.

However, rather than viewing religious fundamentalism weakening due to the dispersal of the Moral Majority, it is better to regard the Christian Coalition as a tactic to infiltrate society. The founder of Christian Coalition, TV evangelist Pat Robertson, ran for candidacy in the presidential primaries of the Republican party in 1988 and fought a good fight. In 1982, this evangelist predicted that Armageddon would occur in the autumn of the same year, and the last judgment would descend on the Soviet Union. He also said at that time "I am not worried because I will be raptured before the final war". Clearly, he believed in the Rapture. Although he got himself into trouble by declaring after the 9-11 terrorist attack, "God punished Americans because of their decadence", it is clear that the founder of Christian Coalition is a staunch fundamentalist Christian and thus, his organization is not so different from the Moral Majority.

In his writings (The New World Order), Pat Robertson criticizes Jimmy Carter and George Bush (father of

the current president) for supporting the United Nations saying they have unwittingly become the instruments of Satan. Regarding the liberal intellectuals, he warns that once the rule of the power of truth, which is the rule of Christ through the fundamentalist Christians starts, they will see their own irrelevance and will not place value on the existence of the United Nations. Clearly, Robertson views the UN as an agent of Satan.

Moreover, the fundamentalist theorist Gary North blamed the liberal group for harping at the strangeness of Theocracy which is based on the bible. Throughout history, Politics and Theology have been at war and the fight of the liberal group against Theocracy has been ceaseless and unrelenting, he argues. They wish for a society that is governed by Satan. Another fundamentalist Christian scholar, Lester Sumrall called upon human beings to fight against the evil spirit which released the power of the devil to spread violence and deprive the Earth of peace. In the minds of the Christian fundamentalists, evil spirit is manifested domestically in the legalization of abortion, the expansion of the rights to same-sex marriage, absolute equality between men and women and internationally, it is embodied in Iraq, Iran, which are labeled by Bush as part of the Axis of Evil, the anti-Israel radical group Hamas and in the godless countries in Europe which opposed America such as France and Germany.

Finally, I would like to think how the fundamentalist Christians view Europe.

The author of Left Behind series, LaHaye has formed an organization of the readers called Left Behind Prophecy Club. Everyday, an e-mail newsletter is sent to the members. The content of these e-mail newsletters merits profound interest. In addition, the founder of the Moral Majority, Jerry Falwell, has nominated LaHaye as the chairman of a new organization "Faith and Values" which is a Moral Majority for the 21<sup>st</sup> century.

For instance in the February 1, 2006 newsletter entitled "Interpreting the signs", LaHaye wrote that until the anti-Christ appears on Earth, there will be no enduring peace in the Middle East. He referred to an old testament biblical passage, Daniel 9:27 and wrote "when the last ruler of the land enters into a covenant with Israel, the seven-year great tribulation will commence", this is the Christian fundamentalist interpretation of the biblical passage. According to them, the anti-Christ will be praised for realizing peace in the Middle East and finally will come to profess himself God. The collapse of Saddam Hussein's regime is also interpreted as a sign that Babylon will be revived and from there an anti-Christ will emerge. The reason for this interpretation is the prophecy in the Revelation according to John, "Babylon will be the center of decadence" at the end of the world. The fundamentalist Christians think that the assassination of Prime Minister Yitzhak Rabin, protagonist in the Middle Peace Process, and the sudden illness of Prime Minister Sharon, who decided to evacuate Jewish settlers from Gaza, are both caused by their efforts to build peace in the Middle East. Palestine must be unstable until the appearance of the anti-Christ.

Now, who is going to be the anti-Christ? According to the fundamentalist Christians, he will be a European. In this sense, the expansion of the EU, integration of Europe and the signing of the EU constitution are serious developments for the fundamentalists. In every newsletter, Mark Hitchcock, a Christian fundamentalist minister offers his original interpretation of the current events. He reminds the readers that the Campidoglio Hill in Rome is the site of the signing of the EU constitution in October 2004 and the Treaty of Rome in 1957 leading to the formation of EEC. He points out that Campidoglio was the center of heathenism in the Roman Empire. The pagan

Roman Empire persecuted the Christians cruelly and the fundamentalists give special importance to the symbolic description in the Revelation according to John. Towards the end of the First Century, during Domitian's rule, when John wrote the Revelation, the evil empire, Campidoglio Hill in Rome was the center of paganism. Hitchcock portrays the rapid integration of the EU as consistent with the biblical prediction, saying, it is "the prelude to the reunited Roman Empire prophesied by Daniel over 2,500 years ago. What we have seen developing in Europe the last 45 years looks strikingly similar to what the Bible predicts for the end times". For Hitchcock, the problem now is when will the EU shift into a group rule organization of "ten kings" which the book of Revelation predicts and when will the organization finally invest the authority to rule in just one person towards the end times. This new ruler will be the anti-Christ and the Roman empire will assume a new form. In time, the empire will rule the world. This will trigger the Second Coming of Christ and Armageddon, which the Fundamentalists have long been expecting to come.

Furthermore, he thinks it was not coincidental that UN Secretary General Annan was present at the signing ceremony for the new constitution and he praised the event as a big milestone in the history of the EU. It is needless to elaborate the meaning of the UN, a Satanic organization endorsing the revival of the evil Roman empire.

In the August newsletter last year, Hitchcock wrote about Iran and took up the "Axis of Evil" (Iraq, Iran and North Korea) which President Bush mentioned in his State-of-the-Union address in 2002. He called the readers' attention to the nuclear development program of Iran and the mediation maneuvers of the EU. He said that Iran (Persia), as predicted in Ezekiel of the old testament, will play a big role in the end times. According to Ezekiel 38:5, Persia, Cush and Kut will be Satan's instruments and will be with Gog's army in the land of Magog, all with shields and helmets. Considering the important role of the EU as Iran's negotiation partner, and the significance of the revival of the Roman Empire at the end times, it is clear that the end of the world is near. It should not be forgotten that the Fundamentalists view Europe as a Roman Empire in the era of paganism.

Let me mention the neo-conservatives who have been influential in the foreign policy of the Bush administration. For example, Robert Kagan, a typical spokesperson for neoconservatives, declared before the Iraq war that the weakness of Europe is manifested in the importance it places on international law, saying, "When the European great powers were strong, they believed in strength and martial glory. Now they see the world through the eyes of weaker powers ('Of Paradise and Power', p. 10)". He even said "It is time to stop pretending that Europeans and Americans share a common view of the world, or even that they occupy the same world" (ibid., p. 4). After President Chirac expressed his opposition to the Iraq war with the veto power of France in the Security Council, Richard Pearl, the former chairman of the National Defense Advisory Committee declared "France is no longer an ally of the U.S. and must be deterred". Having said so, he meant that France must be treated like the Soviet Union during the Cold War.

It can be said that America's religious view of Europe equating it to an evil empire is reflected in the secular terms in the Neoconservative advocacy which is hostile to weak Europe.

The fundamentalist's view of Europe did not appear out of nowhere. It is not that different from the historical perspective with which America has viewed Europe. Traditionally, Americans view the old Europe as deca-

dent in comparison to the new continent which is blessed by God. Thus, Americans have come to view Europe in a suspicious way.

We often look to the Founding Fathers like Washington and Jefferson who were secular leaders in defining the American soul. And we tend to forget the other actors in the creation of America, the Puritan Pilgrim Fathers who came on the May Flower. This is the source of the Fundamentalists' belief that America is a religious (or God's) nation. Without taking it into account, we cannot explain the fact that one in three Americans believes in the literal words of the bible. If we think of the American consciousness hinging on the belief that their country is blessed by God in comparison to decadent Europe, then, it is clear that the unique religious quality of America as a nation presupposes the importance of religion in politics as well.

If the attitude of the U.S. towards Europe is intrinsic in its national character, then, we cannot expect radical changes to American foreign policy even after the demise of the Bush administration. At best, we can only expect some adjustments to it. Tzvetan Todorov says in his recent book "*Le Nouveau Desordre Mondial*" that the European Union must quit depending on the US militarily and rearm itself to become a "quiet great power" to promote global pluralism. I am not arguing whether the Todorov's option is wise or not, but what rather concerns me here, is for Japan to understand the real nature of the U.S. as a nation. Japan must forge a rational relationship with the U.S. and if necessary, help contain it quietly along with Asia and Europe, rearmed or not.